



俺と浮気



しないかワン



幼いころから俺は犬にモテまくった。

「猫山」という名にも関わらず。

どんな犬も、飼い主に牙を剥くような犬だろうと、ちぎれんばかりに尻尾をふったし。

散歩する人とすれちがえば、飼い主を倒してまで、跳びついてきたし。

まあ、興奮するあまり、大型なら乗っかって、小型犬なら足にしがみついてマウンティングをしてきたのには、少々、困ったが・・・。

とはいえ、犬を愛する俺なので懐かれるのは大歓迎。

家が保護活動をしていたこともあり、子供のころから犬とともに愛の溢れる生活をしてきたもので。

家をでて働くようになった今も、シェアハウスに帰れば、ゴールデンリトリバーの「りつくん」が待っていてくれる。

ふだんは忙しく、在宅ワークの同居人に世話を任せっきりなので、休日はつきっきりで面倒を見て、抱きしめながら昼寝をするという至福の一時を堪能。

おかげで、身も心もきれいさっぱりリフレッシュができ、翌日、出勤したなら、仕事にまい進。

空き時間をムダにしまいと、ノートパソコンに高速でタイピングをしていたところ。

「あー！猫山さん、昨日の休み、浮気をしたでしよお！」

背中におおいかぶさって抱きしめられ、ぎよっとしてふり向けば、鼻先には巻き毛の髪にくりくりの潤んだ瞳をした美少年が。

頭には髪色と同じ、垂れ下がった耳がついて、俺からは見えないが、小さい尻尾を小刻みに振っていることだろう。

彼は、アイドルグループ「犬野郎」のメンバーの一人。

「犬野郎」は三人グループで、彼らはそれぞれ自分のイメージにあつた犬のコスプレを。

（ちなみに本物のように見える耳と尻尾は、最新の技術で動いているのだとか）

愛らしい見た目と天真爛漫な性格をした彼は、プードルのコスプレをした「プードル小谷」、あだ名は「プー」。

そりゃあ、かわいさが売りとはいえ、得意とする踊りで、たまに雄雄しいさまを見せるに「ギャップがたまらん」とファンには大好評。

ふだんはグループの末っ子とあって甘えん坊だから、抱きつくのは日常茶飯事。

ただ「浮気」とは聞き捨てならず「どういふことか」と問うとしたら、指を突きつけられた。

指に挟んでいるのは毛。

そう、シェアハウスにいる、りつくんのだ。

「犬野郎のぼくたちがいるってのに。」

よその犬の匂いをぷんぷいんさせるし、仕事着のスーツに、まあ、見

よがしに毛をつけちゃってさあ。

休みの日は、仕事のことを忘れたいから、一切、連絡を受けないとか、
いつていたけど。

心ゆくまで、浮気相手との逢引を堪能するためだったんだねえ・・・」

「浮気とは、そういうことか」腑に落ちるも、しょんぼりするプーは、
ふざけているわけでなさそう。

休日に連絡を遮断するのは、やりすぎだったろうか。

といって、昨日はマネージャーになってから、はじめて休みをとった
のだが。

やや釈然としたなかったとはいえ、うな垂れて耳がぺったんこなのを
見ると放っておけず。

肩に手を添えようとしたら「そうだ！」とおおきな黒目をきらきら。

「もし、ぼくとデートしてくれたら、浮気を許してあげる！

遊園地いって、ショッピングして、ホテルでディナーして、そのまま・・・」

鼻息荒く、額と額がつかんばかりに接近したのが、にわかには遠ざかる。

思わず見あげれば、いかめしい体格と険しい顔つきの銀髪の青年が、プーの襟をつかみ引っぱりあげていた。

やはり、頭には髪色と同じ三角の耳が、そして尻についた銀色のふさふさの尻尾が逆立っていることだろう。

彼も「犬野郎」のメンバーの一人で「シベリアンハスキー尾形」あだ名は「シベハス」。

歌舞伎で見得をきっているような形相をし、怒りっぽい性格だが、なにごとに情熱を燃やし全力全開で臨む、心根のまっすぐないい子だ。

「おまえ、なに、どさくさにまぎれて、猫山さんを誘惑しているんだよ！

浮気の相手が、ただの犬だと分かっているながら、詫びさせようなんて、なんて小癪な！」

「し、し、しかも、ホ、ホホホ、ホテル、なんて・・・」と顔を真っ赤にするのは、怒っているのとは、またチガウようで。

人とはちがう薄く長い舌が、がむしやらに水を飲むように躍動。

バターを舐めつくしたそばから、追加で注がれつづけ、甘い香りに目をくらくらさせながら「はあう、だ、だめえ、あう、ああ・・・！」と喘ぎまくって、ろくに舌が回らず。

相手が半獣で、顔は人といっても、頭の三角耳を見るたび、罪悪感に苛まれてやまない。

それでいて「なんて、いけないことを・・・！」と逆に胸が高鳴るようで、熱く疼く肌は、快感に痺れてやまない。

体中にバターを垂らされ、舐めまわされるだけでなく、空いた手でいたずらも。

バターまみれの上半身を、丁寧懇切に限なく舐めて撫でられて、たまらずボンにテントを張って、じわあと染みを広げてしまい。

ちらりと下半身を見たアキくんは、でも、手を伸ばさずに、首を舐めあげながら、バターを塗りつけるように両乳首を指で挟んでにゅちゅにゅちゅ。

ぴんと立つ三角耳が目にはいつて、罪悪感に炙られながら、体がはちきれそうな快感を持てあまし、太ももをすり寄せて、濡れる股間からも水音を立てて。

「は、はう、だめえ、お、俺、犬、にい、こんな、ことお、ふあ、あ、あん、あん、ち、ちが、ちが、のにい、ど、どして、はひいん！や、やあ、胸え、強、しな、う、くう、ああう、ふあ、ひいあ！？はああああん！」

